人生100年 健やかに生きる ～体育・スポーツとともに～ ⑧

国民スポーツ大会に思う

地域発展、生活向上も

NPO法人 ならスポーツクラブ理事長
北 良夫（91）

今年の10月、鹿児島県で特別国民体育大会が開催される。鹿児島県は1972年の27回大会を開催し、2巡目が3年前に開催の決定をしていたが、コロナ禍で延期、今回は「特別国体」として催される。

「国体」は戦後間もない46年、京阪神を中心に開かれ、本県でも橿原公苑で自転車競技と相撲が開催された。その後、第8回夏季大会が天理市で、そして第39回大会が84年「わかくさ国体」と称して開かれてから早くも40年が過ぎた。

私自身の国体への参加は、専門とする陸上競技ではなかなかチャンスに恵まれず、53年やっとハンドボールで、近畿予選を突破して本大会出場を果たした。その後54年冬季国体（北海道）スキー競技、55、56年はバスケット競技で出場、57年（静岡）に、やっと陸上競技で本大会出場が実現した。

その後は陸上競技の選手、監督として、また、県選手団の役員としても参加を経験させていただいた。そのようなおかげで2003年、国体30回以上の参加者として、日本体育協会から特別表彰を頂く名誉に浴した。

わかくさ国体で、県競技力向上対策本部責任者の担当を頂いて奔走した。当時の開催県には総合優勝が必須と言われてきた時代で、毎年40位前後の成績を歩んできた、本県の競技力を高める取り組みは至難の業であった。

わかくさ国体で開催される競技は36競技、その中には組織もない指導者はもとより選手もいない競技（未普及競技）17競技を数え、競技力を育成する以前の課題があった。中でも海のない本県にはヨット、ボート、カヌーの組織づくりは大変な作業であった。わかくさ国体から40年たって今も絶えることなく、その活躍には頭が下がる思いである。

ボクシング、レスリングもゼロからのスタートであった。わかくさ国体がきっかけで育った選手は、その後指導者としても活躍、今や本県の競技力の高い伝統的スポーツとなって、全国でも評価を受ける存在にある。このような活動は未普及競技のみならず、どの競技団体にとっても、わかくさ国体は競技の成長発展のチャンスとなったことは間違いない。苦しかった国体開催の取り組みではあったが、振り返ると国体は、本県スポーツの振興はもとより、県民の生活向上、健康増進、人と人のつながりに寄与し、地域発展に貢献してきた。

「わかくさ国体」で県体育協会専務理事として県選手団を率い、総合優勝に導いた著者＝1984年、奈良市鴻ノ池陸上競技場

8年後に迎える2巡目の国民スポーツ大会に、県民は何を期待しているのであろうか。先のわかくさ国体では、県に存在しなかった競技の育成や、開催市町村の運動施設の整備が進められて、大会後の県民の生活向上に寄与するところとなった。

また大企業の少ない本県では、総合優勝を目指す取り組みとして、「少年の部」に期待するところが大きく、学校の部活動の育成に相当な援助が注がれた。このことは国体後の本県のスポーツ発展に生かされて今日に至っている。昨今、学校部活動は、地域のスポーツクラブに移行する動きが模索されている。これらの時代の変化に今後の国民スポーツ大会開催は、どのように対応するのか、また新しい課題が生まれそうである。

※「国民体育大会（国体）」の名称は来年から「国民スポーツ大会」に変更される。

＝第2、4金曜日掲載予定＝